岩手のラグビー50周年によせて

元岩手中学校教諭
広　嶋　英　雄

岩手のラグビー

麗峰岩手を仰ぎ見て
　尽きせぬ流れ北上の
　　ほとりに小さく根をおろし
　　風雨に耐えて五十年

城下の大沢川原町
　石割桜の校章に
　　血潮たぎらす岩中健児
　　弾むボールに名誉をかける

変転極まりなきボール
　寒気を突いて若人の
　　集散自在の逞しさ
　　古武士ながら意気高し

魅力溢るるこのボール
　幾多の人に渡り
　　永久に伝えて限りなく
　　弥栄岩手わがラガー

（昭和53年３月17日（誕生日）

岩手のラグビー発祥当時を想う

●新興学園に赴任

盛岡市内に第二中学校的意義をもって創設された岩手中学校（岩手高校の前身）に私が赴任したのが昭和２年の春で、創設の翌年であった。日体を卒業したばかりの血気旺んな若い教師で、生徒にとっては兄貴分に見えたと思う。

学校は大沢川原町で女学校の跡であった。校舎は老朽化し、校庭は矮小で前の方にはテニス・コート２面、裏の方にはバスケット・コート２面のスペースしかなかった。周囲には桜の大木が並んでいた。そのすぐ外は川と道路で身動きができない処であった。

こんな立地条件のもとでラグビーが誕生するなんて信じられないことであろう。

●初代校長の抱負

初代の校長は栃木女子師範学校の校長を勤められた鈴木卓苗先生であった。就任の挨拶に先生にお会いした。先生は私に期待をかけられていたようである。先生の第一声が私の胸を打った。

「学校は誕生したばかりで若いし、君も若い。実践力のある逞しい生徒に育てたいんです。御協力下さい。本校の教育のことならすべての責任は校長がとるから思い切ってやってほしいんです。」と述べられた。

私は勇気づけられ、この新天地を開拓するこ

とを生き甲斐にしようと決心した。そして日々胸を張り、希望に燃えて登校した。

すべての行事を全校挙って行う方針を立てた。春は蕨狩りとマラソン会。夏は水泳（杉土手プール）と岩手登山。秋はバスケット・ボール大会とクロスカントリー（騎兵連隊の練兵場）。冬はラグビー（岩手公園）と兎狩りであった。

●正課体育にラグビー

学校は二学年四クラスとなった。運動具店からいろいろな種類のボールを購入したが、ラグビーボールは間に合わなかった。久保庄運動具店かと思うが、その店を通じて10個のボールを揃えることが出来た。

秋になった。型破りの楕円形のボールが生徒の前に持ち出された。生徒たちの眼球は輝いた。物珍しさに追いかけ、奪い合い、そして蹴った。変転極まりない剽軽なボールは生徒達の心をとらえずにはおかなかった。

このボールのプレーされた場は校舎の裏側にある猫の額ほどの広場であった。このボールが出されてから毎日のように苦情を受けたり、小言を言われた。蹴ったボールが桜の枝を傷め、板塀を越して旅館の庭園を荒したり、中津川に転落したりするからであった。

●岩手公園にプレーの場を移す

若いエネルギーは狭い校庭には納まらなくなった。いよいよ近くの岩手公園に進出するのである。ボールを抱える者、コーナー・フラッグを持つ者、整然と駈足で公園の広場を往復するのであった。

公園の広場は石カラでタックルやセービングが出来る状態ではなかった。二の丸の芝生が格構の場であった。ここでも公園管理者から大目玉を喰らった。

「草が大切か、青年が大切か」などと意気巻くひと幕もあった。

●全校生徒にジャージ着用

岩中にも３年生が出来た。学年を通じて甲組には黒と黄の縞、乙組には黒と小豆色の縞のジャージを着用させ、下は白のトレ・パンを穿かせた。凜々しいいで立ちである。

私自身はラグビーの経験がなかったので、香山蕃氏著の「ラグビー」を熟読し、抜書きしてプリントを作って生徒に読ませた。又しばしば仙台二高の練習を見学に出かけたり、休暇には東京や京都まで出かけて大学対抗試合を観戦して知識を上乗せしていた。この努力が岩手のラグビーを育てたと思っている。

●初めての学級対抗試合

いろいろの運動クラブを発足させ、育てていたが、最上級生ができるまでは対抗試合をしないことにし、内に力を貯えることとした。

昭和３年秋、岩手公園の広場で学級対抗試合を行った。これが岩手県下の初めてのラグビー試合である。当時の強者の面々が瞼に浮かぶ。

戸嶋正夫	F・B
梅津武雄	T・B
藤原俊彦	T・B
桐野充功	T・B
川畑篤司	T・B
坂本正男	H・B
太田勇	H・B
川村源吉	F・W
藤森左一	F・W
小保内宮道	F・W
柳沢博	F・W
高橋兵吉	F・W
佐藤芳雄	F・W
石井律郎	F・W
松浦文弥	F・W

このメンバーのうち今は亡き6名を数えるのは悲しい。

盛岡市内には高等農林学校、師範学校、盛岡中学校、商業学校、工業学校、農学校等の男子学校があったので、しばしばP・Rに出かけたが、直ちに応ずる気配は見られなかった。それどころかあの様な乱暴な運動は御免こうむりたいとの返事が返って来た。荒野に種をおろしたもののこれを育てるには容易ならぬ努力と一層のP・Rが必要であることを認識したのであった。

岩中の国語の教師に大枝先生が居られた。先生の友人に朝日新聞の記者が居られ、その方を紹介していただき、新聞紙上にラグビーの紹介を記事として書いてもらった。

そうしているうちに新設校の岩手医学専門学校の生徒が数人でボールを公園でプレーするようになった。盛岡中学校でも自校の運動場でラグビーボールを蹴る者が現れた。私は市内校にクラブができてくれることを期待していた。

当時東北にラグビー部のあったのは秋田工業学校唯一校だけであった。このクラブは日体で私と同期の長谷川氏が種をおろしたものであって、同期の誼みで岩中に5年生が出来たら定期戦をと約していた。

●岩中を去る

昭和5年には岩中も5年生が出来た。いよいよ希望の年を迎えた。盛岡の4月はまだ肌寒い季節である。生徒は対外試合に備えて練習にはげんだ。

6月下旬から水泳に切りかえる。夏が来た。不幸がひそんでいるなんて夢知らなかった。7月初旬に水死事故が起こった。暑い日の午前軍事教練で2年生が北上川渡河訓練後、雫石川下流で水泳中に生徒の一人が死んだ。

その責任の一端を負わされる羽目となり、10月初旬に米沢中学校へ去った。11月に秋田工業との初めてのラグビー戦が約されていた。試合当日は米沢から駈けつけた。試合は秋田鉱専のグラウンド。風雨の悪天候の中で行われた。

岩中チームは秋工チームの軍門に下ったが、この厳しさの中から本当のラグビーを学んだのである。

●あと書き

スポーツに限らず、盛んになるとその源泉を知ろうとするのが人情の常である。

盛岡の大地に楕円形のボールを私が転がしてから50年の歳月を経た。正に半世紀である。あのボールが幾多の若者の血を沸かして来たが、今ここに50周年の式典並びに記念行事の日を迎えるに当り、感無量である。

物事を始めることは至難には違いないが、それを継続し、発展させることは更に至難の業である。幸いにも岩中に私が在職中に手塩にかけた当時の生徒たちが、ラグビーに情熱を燃やし、若者の情熱をかき立てて来たからこそ今日の成果を見たものと信じている。

私は、齢正に71。おかげで頑健で今もなお若者を激励しながら健康の日々を送迎している。命ある限り、岩手のラグビーを見守りたいと念じている。